

# 国立歴史民俗博物館総合展示 第1室(原始・古代)の新構築事業 2014年度活動報告

Renovation Project of the Permanent Exhibition Gallery One (Prehistoric and Early Japan)  
of the National Museum of Japanese History : FY 2014 Activity Report  
SHIBUTANI Ayako and KAMI Naomi

渋谷綾子・上 奈穂美

## はじめに

本稿は、国立歴史民俗博物館総合展示第1室新構築事業（以下、第1室リニューアルと略）における2014年度の活動に関する記録である。前稿〔渋谷, 2014; 渋谷・大塚, 2015〕に引き続き本稿においても、第1室リニューアルの準備状況や展示リニューアル委員会の概要を示すことで、現在の展示構成や設計状況について可能な限り精緻な記録を残すことを目的とする。

2014年度初めに実施設計図作成業者が（株）日展に決定し、展示テーマの構成案や展示資料の配置図、映像などのデジタルコンテンツ、展示解説パネルや遺跡地図、写真図版等のグラフィックリストの作成について、日展と各テーマ担当者との間で詳細な検討を毎月実施した。同時に、展示予定資料として実物資料や複製資料、大型模型、復元画などを前年度に引き続いて選定・製作した。本稿では、実施設計図作成業者が決定して以降、2014年度に進められた各テーマの構成内容とともに、展示予定資料の調査や複製資料・大型模型の製作状況について報告する。

## 1 第1室リニューアルの展示構成と実施設計図

第1室リニューアルの展示構成は第I期展示の課題をふまえており〔大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 2004; 渋谷, 2014〕, 2014年度も引き続き展示リニューアル委員会の全体会議と館内委員会議（図1）の双方で検討を行った。さらに、2014年度は2013年度に館内で確定された基本設計（展示構成の全体設計）にもとづいて詳細設計（実施設計）を作成するため、各テーマ担当者と日展との検討も毎月実施した。その結果、2015年4月現在の展示テーマ構成は下記の通りほぼ確定され、展示平面図案は図2のように設計が進められてきている。

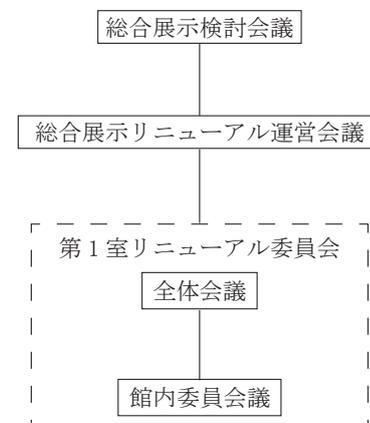


図1 総合展示第1室リニューアルに関わる各種会議の構造

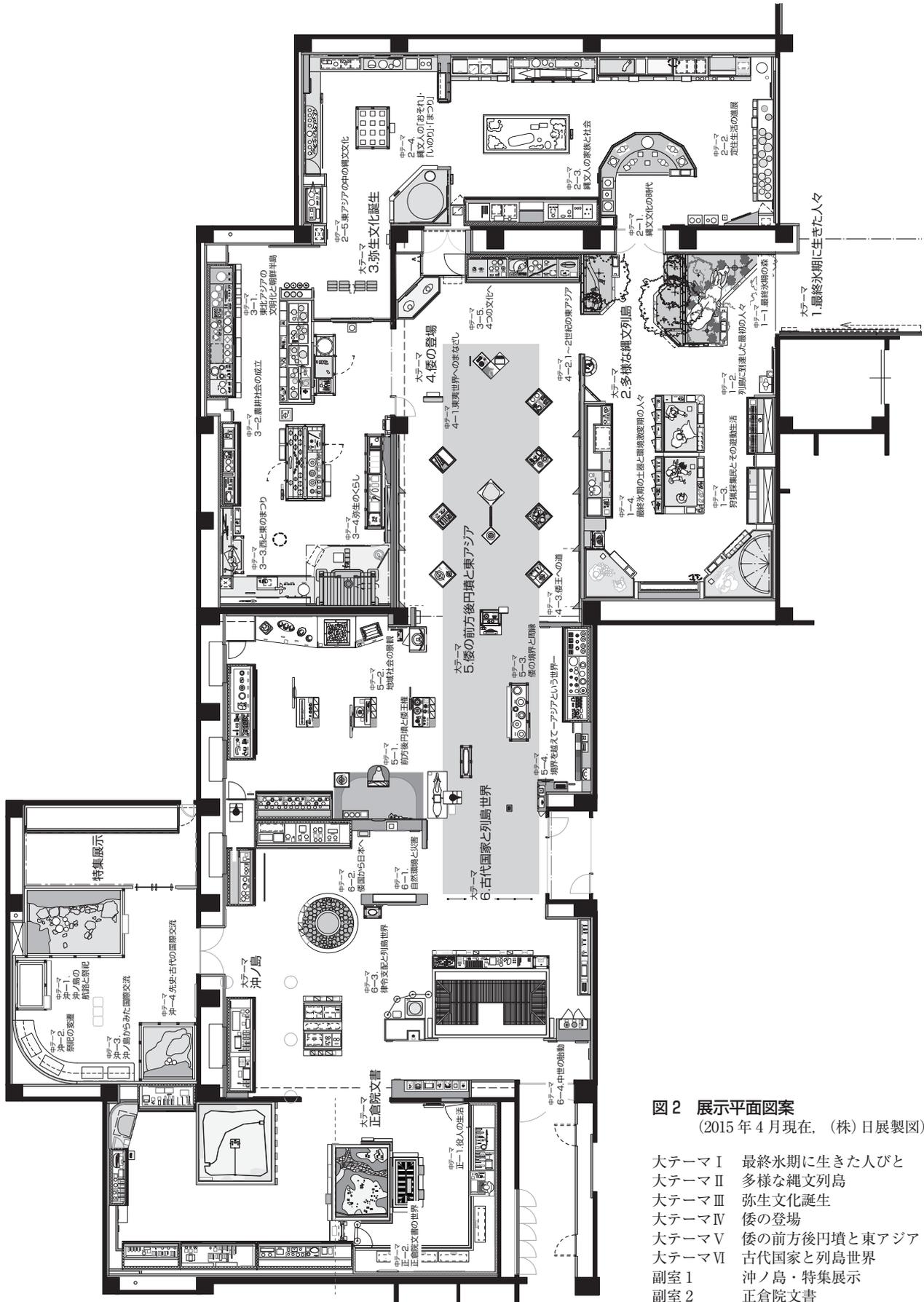


図2 展示平面図案  
(2015年4月現在, (株)日展製図)

- 大テーマⅠ 最終水期に生きた人びと
- 大テーマⅡ 多様な縄文列島
- 大テーマⅢ 弥生文化誕生
- 大テーマⅣ 倭の登場
- 大テーマⅤ 倭の前方後円墳と東アジア
- 大テーマⅥ 古代国家と列島世界
- 副室1 沖ノ島・特集展示
- 副室2 正倉院文書

---

<リニューアル後の展示テーマ構成> (2015年9月末時点)

I 最終氷期に生きた人々

1 最終氷期の森

① 最終氷期の森

2 列島に到達した最初の人々

② 現代人的行動ってなに!?

③ 列島最初の人々が残したもの

④ 環状のキャンプに集う

3 狩猟採集民とその遊動生活

⑤ 寒冷環境への適応

⑥ 石器を作る

⑦ 遊動生活と住居

⑧ 良質の石材を求めて

⑨ 大陸との関係

⑩ 動物の狩猟と食料

⑪ 旧石器時代の落とし穴

⑫ 植物質の食料の利用

⑬ 祈りとアクセサリー

4 最終氷期の土器と環境変動期の人々

⑭ 東アジアの土器の出現

⑮ 土器文化の急速な広がり

⑯ 定住的な生活の始まり

⑰ 狩猟具の変化と弓矢の登場

⑱ 南九州の集落と植物利用

⑲ 石偶と日本最古の土偶

[コラム] れきはくサイエンス・ラボ

II 多様な縄文列島

1 縄文文化の時代

① 縄文文化の環境

② 縄文人登場

③ 定住生活の進展

④ 縄文文化の地域性

⑤ 民族誌からみた縄文文化

2 定住生活の進展

⑥ 計画的な食料の調達

⑦ 高度な植物利用技術の発達

⑧ 高度な動物利用技術の発達

- 
- ⑨ 計画的な土地利用
  - ⑩ 交易・交流ネットワークの発達
  - ⑪ 各地の集落と社会
  - 3 縄文の家族と社会
    - ⑫ 縄文人の一生
    - ⑬ 特別な人々の出現
  - 4 縄文時代の「おそれ」・「いのり」・「まつり」
    - ⑭ 縄文人のけが・病気
    - ⑮ 縄文人の死生観
    - ⑯ 再生・循環の「いのり」と「まつり」
    - ⑰ 縄文人の祖霊祭祀
  - 5 東アジアの中の縄文文化
    - ⑳ 大陸との接触
- Ⅲ 弥生文化誕生
- [コラム] れきはくサイエンス・ラボ
- 1 東北アジアの文明化と朝鮮半島
    - ① 朝鮮半島の農耕社会化
    - ② 縄文後・晩期
    - ③ 列島各地の初期水稻農耕
  - 2 農耕社会の成立
    - ④ 列島の鉄器文化
    - ⑤ 武器と戦い
  - 3 西と東のまつり
    - ⑥ 西のまつり
    - ⑦ 東のまつり
  - 4 弥生のくらし
    - ⑧ 弥生のむら
    - ⑨ 弥生の墓
    - ⑩ 弥生の自画像
  - 5 4つの文化へ
- [コラム] 弥生 VS 縄文
- ⑪ 北縁、南縁の水田稲作文化
  - ⑫ 北の文化、南の文化
- Ⅳ 倭の登場
- 1 東夷世界へのまなざし
    - ① 漢と倭
-

- 
- 2 1～2世紀の東アジア
    - ② 中国王朝の世界—漢—
    - ③ 朝鮮半島の世界—楽浪と三韓—
    - ④ 南北市羅の世界—壱岐・対馬—
    - ⑤ 金印かがやく世界—北部九州—
    - ⑥ 東西海廊の世界—日本海—
    - ⑦ しまなみの世界—瀬戸内海—
    - ⑧ 平野ひろがる世界—近畿—
    - ⑨ やまなみの世界—東海・中部・関東—
  - 3 倭王への道
    - ⑩ 倭王への道
- V 倭の前方後円墳と東アジア
- 1 前方後円墳と倭王権
    - ① 前期の古墳
    - ② 中期の古墳
    - ③ 後期の古墳
  - 2 地域社会の景観
    - ④ 王をめぐる風景
    - ⑤ 集落での生活
    - ⑥ 時代を変える新たな技術
  - 3 倭の境界と周縁
    - ⑦ 倭の北縁と北方世界
    - ⑧ 倭の南縁と南方世界
    - ⑨ 朝鮮半島の倭系古墳
  - 4 境界を越えて—アジアという世界—
    - ⑩ アジアの王権
    - ⑪ 王権の天下観
- VI 古代国家と列島世界
- 1 自然環境と災害
    - ① 自然環境
    - ② 災害
  - 2 倭国から日本へ
    - ③ 仏教伝来と古墳の終末
    - ④ 飛鳥と難波、藤原京
    - ⑤ 「日本」建設
  - 3 律令支配と列島世界
    - ⑥ 都の明と暗
-

- 
- ⑦ 古代の集落と役所
  - ⑧ 古代国家の北と南
  - ⑨ 東アジアのなかの列島世界
  - 4 中世の胎動
    - ⑩ 中世の胎動
  - 副室1 沖ノ島・特集展示
    - 1 沖ノ島の航路と祭祀
    - 2 祭祀の変遷
    - 3 沖ノ島からみた国際交流
    - 4 先史・古代の国際交流
  - 副室2 正倉院文書
    - 1 役人の生活
      - ① 写経生の生活
      - ② 役人の生活
    - 2 正倉院文書の世界
      - ③ 公文書の世界
      - ④ 写経所文書の世界

## 2 2014年度の活動概要

2014年度は、2013年度に館内で確定された基本設計にもとづいて詳細設計を作成する作業が中心となった。4月に行われた「総合展示第1室新構築展示設計審査会」において実施設計図作成業者が(株)日展に確定し、日展と館内の第1室リニューアル委員との間で、展示テーマの構成案や展示資料の配置図、映像などのデジタルコンテンツ、展示解説パネルや遺跡地図、写真図版等のグラフィックリストの作成を進めた。

2012・2013年度はいわば2次的な展示プランにとどまっていたものが、2014年度に日展が加わることによって、立体的でより具体的な展示プランへ統合された。この展示プランは館内委員会議で詳細な検討を行った後、2度の展示リニューアル委員会にはかり、館外委員の意見を得た。それをもとに、2015年度も引き続き詳細設計が進められ、2015年8月末に詳細設計の完成となる。展示資料に関しては、2013年度と同様に、実物資料の長期借用にかかわる各研究機関との調整が行われ、同時に複製資料や大型模型の製作が実施された(図3)。

館内の第1室リニューアル委員と日展による各テーマの検討結果を受けて、2014年度は各テーマで要する諸費用(内装・造作、新規ケース、既存展示ケース・ステージの補修、什器や演示具、検索・映像機器、ソフト制作、サイン・グラフィック製作、模型・ジオラマ製作)と、既存物移設・補修、電気設備、照明設備などの共通工事費用、さらに運搬費、直接仮設費、共通仮設費、現場管理費、一般管理費、および解体撤去費といった展示工事の全体にかかわる費用の検討も行われた。これらの検討を経た上で、2015年度以降も展示工事の準備を進めていくことが館内全体の同意を得て確定された。

---

【第1室リニューアル委員会】

全体会議（国立歴史民俗博物館で開催）

・2014年8月4日・5日

議事：展示設計提案書，各テーマ構成，展示予定資料，展示資料配置図（平面図・展開図）の  
検討

・2014年12月12日

議事：各テーマの詳細設計，展示予定資料，展示資料配置図（平面図・展開図），サイン・グ  
ラフィック，映像コンテンツの検討

館内委員会議

・2014年4月4日・28日，5月26日，7月28日，10月27日，2015年1月13日，2月23日，  
3月23日

議事：各テーマの詳細設計，予算の進捗状況，今後の実施計画についての検討

【総合展示リニューアル運営会議】

第1回 2015年3月10日

・1室新構築事業の工程の説明と今後の予定，閉室時期について検討・報告

【総合展示第1室新構築展示設計審査会】

2015年4月25日（大学共同利用法人人間文化研究機構本部で開催）

・各社による企画提案の聴講

2015年4月28日（国立歴史民俗博物館で開催）

・実施設計図作成業者を選定するための審査

【展示設計打ち合わせ】

全体打ち合わせ（第1室全体の展示配置，予算案等について検討）

2014年5月26日，9月3日，10月8日，12月25日，2015年1月8日

映像打ち合わせ（映像製作の全般について検討）

2014年11月5日

テーマ別打ち合わせ

大テーマⅠ：2014年6月23日，7月31日，9月29日，11月5日，2015年1月14日，  
2月13日・18日

大テーマⅡ：2014年6月12日，7月4日，8月18日，9月4日，10月16日，11月27日，  
2015年1月29日，2月23日，3月3日

大テーマⅢ：2014年6月4日，7月17日，9月5日，10月27日，12月2日・19日，  
2015年1月26日，2月25日，3月9日

大テーマⅣ：2014年6月13日，7月22日，10月3日，11月14日，2015年1月21日，  
2月12日，2月16日・20日

大テーマⅤ：2014年6月13日，7月24日，10月3日，11月14日，2015年1月21日，  
2月12日・20日

大テーマⅥ：2014年6月30日，7月25日，9月18日，11月6日，2015年1月23日，

---

2月12日, 2月16日

副室1 沖ノ島・特集展示: 2014年6月25日, 7月22日, 7月24日, 11月17日

副室2 正倉院文書: 2014年6月25日, 7月22日, 10月22日, 11月21日, 2015年1月27日,  
2月18日

### 3 資料製作活動の概要

#### 1) 複製資料と大型模型の製作目的

前稿〔渋谷・大塚, 2015〕で述べたように, 2013年度から第1室リニューアルで展示予定の複製資料の製作, 大型模型の製作や改修が開始された。2014年度も引き続き, 可能な限り実物資料の借用を試みて, 各研究機関との調整を行うとともに, 複製資料や大型模型の製作を随時進めてきた(図3)。

ここでは2014年度に製作された資料のうち, 大テーマⅢ(弥生文化誕生)の展示予定資料であるイエネコ生体復元模型を例として取り上げ, どのような調査を経て製作されているのかを報告する。当該資料は2014年度に事前調査と製作を始め, 2015年度に製作完了となる。

#### 2) 2014年度のイエネコ模型制作

##### 制作資料の概要

大テーマⅢでは弥生時代の人びとの暮らしに焦点を当て, 水田稲作を中心とした生活復元の展示の中で当該期に利用された動物を紹介する。第1期展示でも弥生ブタ〔西本, 1991, 1993〕を初めとする動物資料を展示しているが, 近年の調査で弥生時代にイエネコがいた可能性を示す骨が見つかったことを受けて, 親仔各1体分のイエネコ模型を制作し, 展示中で弥生人の暮らしとの関わりを示すことにした。

制作に当たり, 復元の根拠となる資料や記録類に関する調査を実施し, ①配置場所とポーズ, ②サイズと外形, ③毛柄について検討を行った。参考としたのは長崎県壱岐市カラカミ遺跡出土のイエネコ *Felis silvestris catus* である。同遺跡では2005～2007年度, および2011年度に実施された発掘調査により, 日本列島で最古となる同種の骨が3体分確認された。成獣の橈骨が弥生時代の遺構から1点, 若獣<sup>(1)</sup>2体分の後肢を中心とした骨が同時代の貝層中から13点出土し, AMS炭素14年代測定の結果, 若いネコの骨については紀元前2世紀を中心とした時期( $2140 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP (350～50cal BC))に属することが判明している〔納屋内・松井, 2008, 2011〕。

2014年度には2体分の簡易模型の成形を終え(図4:1), 2015年度前半には粘土による原形模型の制作と型取り, FRP樹脂を使った外形の成形, 毛柄の彩色を行う。ここでは, イエネコの移入(導入)と各検討結果, および模型制作の工程について述べる。

##### 日本へのイエネコの移入

イエネコはリビアヤマネコ *Felis silvestris lybica* を祖先にもち, 北アフリカから西アジアを中心に家畜化されて世界中へ広がったと考えられており, 分子系統学的分析からも同種がリビアヤマネコと最も近縁であることが指摘されている〔Driscoll *et al.*, 2007〕。現在のところ, ネコの飼育の可能性を示す古い出土例としては, 紀元前約7,500年のキプロス島の埋葬例〔Vigne *et al.*, 2004〕と紀

元前約3,500年の中国陝西省の出土例 [Hu *et al.*, 2014] が挙げられるのみである。ただし前者は飼育されたヤマネコであった可能性が高いとされ、後者もイエネコといえるかどうか疑問が呈されており [Bar-Oz, 2014], 家畜化がどの程度進んでいるか明らかではない。

ネコの出土例はエジプトに多く認められ、古いものでは紀元前約4,000年のヒトの墓からガゼルと一緒にみつかった例 [Malek, 1993] や、紀元前約2,000年の墓から17体分の骨が奉納用の容器と一緒にみつかった例もあるものの、資料が現存せず、骨の図や計測値等も残されていないため、これらについても家畜化の程度は不明である。この時期以降、同地域ではネコの飼育が盛んに行われたようで、出土例やネコを描いた絵画や姿を模った製品等が増加し、紀元前後には捧げものとしてネコのミイラも多量に作られるようになった [Ikram, 2005]。その後、大陸伝いあるいは海を越えてヨーロッパやアジアへのネコの移入が進み、中国大陸 [王, 2006 ; Driscoll *et al.*, 2009] や朝鮮半島 [松井ほか, 2009] を経て、弥生時代の日本列島にもネコが渡ってきたのであろう。

これまで確認されている日本列島への移入時期は、古記録によると8～9世紀以降、考古資料では6世紀末～7世紀中頃以降、動物遺体自体の出土例では約8～10世紀以降であるが、前述のカラカミ遺跡の出土例<sup>(5)</sup>によって移入時期は大きく遡ることになった [納屋内・松井, 2008, 2011 ; 西本, 2010 ; 山根, 2010]。

#### イエネコ復元に関する調査

##### ① 展示配置とポーズ

展示では、ネコの飼育目的が伝わるような配置とポーズにする。ここで、ネコの飼育目的について考えてみたい。カラカミ遺跡のネコは、解剖学的な位置を保った状態で出土したのか不明である。頭骨や前肢を欠いた個体や骨がバラバラの状態でも出土した個体もあることから、埋葬の可能性は低く、縄文時代のイヌのような使役動物や現代のペットのような愛玩動物としての飼い方とは異なっていたと考えられる。

ネコは物資の運搬や人間のための狩猟の手伝い等には全く役に立たず、使役動物とは言いがたい。また、繁殖力は強いものの、餌の確保や繁殖管理の難しさといった点から食肉や毛皮だけを目的とした飼育とは考えにくい。以前より指摘されるように、夜行性で、穀物自体には関心を示さずに穀物に群がるネズミや昆虫を捕食する等の習性が当時の人々に着目され、人間にとって重要なものを害獣や害虫から守る役目を担っていた可能性が考えられる。実際、穀物や経典等の書物だけでなく、近年まで船旅や養蚕においても鼠害や虫害を避ける手段としてネコ [平岩, 1992] やヤマネコ [ブラッドショー, 2014] を飼った例もみられる。

今回は、農耕社会におけるネコの役割を示すため、以下のような配置とポーズに決定した。季節を秋と設定し、高床倉庫の側には穂摘みをして乾燥させた稲穂を脱穀する女性を配置、倉庫内には穀物を取めた土器を設置する予定である。倉庫入口には母ネコを配置し、仔ネコが見える範囲に座って毛づくろいをする様子やネズミや昆虫から穀物を守る倉庫番としての役割が伝わるよう展示する(図4:1, 2)。高床倉庫のハシゴには仔ネコを配置し、母ネコの元に駆け寄り途中、梯子に引っかかる稲穂にじゃれつく姿を展示する予定である(図4:1, 3)。

##### ② サイズと外形

カラカミ遺跡で出土した3体分については実際の親子関係や雌雄が不明であるものの、展示構成

上、母仔と設定した。仔ネコ模型の月齢は同遺跡のものとは異なるが、仔ネコが存在したという事実に基づき、約2ヶ月齢まで遡らせたものを制作することにした。

模型のサイズは、現代のネコの7ヶ月齢以降の成猫と2ヶ月齢の仔猫の頭胴長および肩高<sup>(7)</sup>を基に復元する。弥生併行期となる紀元前後のエジプトではネコのミイラ作りが隆盛しており、サイズ復元の研究によると、ミイラにした当時のネコは現代のネコよりも1割以上大きいことがわかっている[Morrison-Scott, 1952]。ただし、カラカミ遺跡の成猫の骨は現生標本と比べて細く小さいため<sup>(8)</sup>、若干小さめの品種のシャム[平岩, 1992]も参照し、母ネコは頭胴長約500mm、肩高約250mm、仔ネコは頭胴長約270mm、肩高約140mmとした。

また、母仔ともに痩せ気味にする。カラカミ遺跡は交易に特化した漁撈民の集落[宮本, 2011]であり海岸線に近く魚類も多く利用していたが、ネコまでが豊富にエサをもらえた状況かは不明である。恐らく当時のネコも現代のノラネコ同様、ネズミ等の捕獲により食料の大半を自力に近い状態で得ていたと思われる。そのため、現代の飼いネコに多く観察される飽食で太った体躯にはせず、痩せ気味にした。

外形については、頭部や尾、耳の形、眼色を中心に検討した。頭部の形は、カラカミ遺跡の資料に頭骨が無い場合、エジプトのミイラや絵画等の外形のわかる資料や現代のネコ[林, 2003; 大石, 2013]を参考にした。顔は丸顔とV字形の中間的な形に、口吻もいわゆる「洋猫」と「和猫(ニホンネコ)」との中間的な、やや丸みを帯びた形にする予定である。その他、尾についても同様に中間的な長さとし、ジャパニーズボブテイルのようなアジアの品種に多いと指摘される短尾を見送り、母ネコの尾は「お座り」をした際に前足まで回り込む程度の長さにする。耳については、一見して仔ネコと判別のつくように、顔と比べやや大きめに目立たせ、母ネコの方は中間的で、あまり先を尖らせない形にする予定である。眼色については毛柄と合わせ、現代のネコを参考に黄緑をベースとした色にすることにした。

### ③ 毛柄

時期的に弥生時代に近い、古代中国や古代エジプトの彩色の施された土・石製品や絵画を参考資料として検討を行った。当初は漢代の俑に当たったものの、ネコは見つからず、原種であるリビアヤマネコの毛柄やエジプトの絵画に従って、模型の1体は縞のタビー模様(キジトラ)にする予定である。

もう1体については次の資料を参考にした。国内のネコの毛柄についての比較的古い記録として、平安時代の『寛平御記』中の黒ネコについての記述が挙げられる[平岩, 1992]。自身が譲り受けた中国伝来の「唐猫」の黒さを周囲の黒ネコと比較し褒め称えていることから、当時の日本に黒ネコが存在していたことがわかる。他に、国内のネコではないがより古い資料があり、唐代の絵師刁光胤による絵画『唐刁光胤寫生花卉 冊 灌木游蜂山猫出谷』の中では白黒斑(ブチ)が描かれていることから、もう1体をこの白黒斑<sup>(9)</sup>模様<sup>(9)</sup>に決定した。毛柄の遺伝[林, 2003; 大石, 2013]を考慮して、母ネコに黒白斑を、仔ネコにタビー模様を振り分ける予定である。毛の長さはどちらも短毛種を想定している。

## 模型制作

以上の検討結果に基づき、2体同時に模型制作を開始した。工程としては、まず現展示室の高床倉庫上で配置とポーズ、サイズを確認しながら簡易模型を制作し、次いで粘土による肉付けを施して原形模型を成形する。さらに外部形態や毛並みも含めた細部の調整が済んだところで型取りし、最後にFRP樹脂を用いて成形し、毛柄の彩色を施して完成となる。

2014年度は展示配置とポーズ、サイズを決定し簡易模型を制作した。ポージングの際は高床倉庫上に模型を実際に配置して手足の接着点を調整し、配置場所に模型が収まることを確認した(図4:1)。

2015年度は原形模型の造作となる。粘土原形に移ると、簡易模型のような比較的粗い仕上がりから、より細部の表現を重視した制作になるため、解剖学的な知見も加えて制作を進める予定である。

## 4 第1室リニューアル展示プロジェクト委員

第1室展示プロジェクト委員は下記のとおりである。所属・役職については2015年4月時点のものである。

### <館内>

藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館	研究部	教授(代表)
林部 均	国立歴史民俗博物館	研究部	教授(副代表, 2015年3月まで)
松木 武彦	国立歴史民俗博物館	研究部	教授(副代表, 2015年4月から)
上野 祥史	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
小倉 慈司	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
工藤雄一郎	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
鈴木 卓治	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
高田 貫太	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
西谷 大	国立歴史民俗博物館	研究部	教授
仁藤 敦史	国立歴史民俗博物館	研究部	教授
三上 喜孝	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
村木 二郎	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
山田 康弘	国立歴史民俗博物館	研究部	教授
渋谷 綾子	国立歴史民俗博物館	研究部	プロジェクト研究員(2012年8月~2015年3月 特任助教, 2015年4月~現職)

### <館外>

小畑 弘己	熊本大学文学部	教授
亀田 修一	岡山理科大学総合情報学部	教授
川尻 秋生	早稲田大学文学学術院	教授
設楽 博己	東京大学文学部・大学院人文社会系研究科	教授
瀬口 眞司	公益財団法人滋賀県文化財保護協会	企画調査課 副主幹
谷口 康浩	國學院大學大学院文学研究科	教授

堤 隆 浅間縄文ミュージアム 主任学芸員  
菱田 哲郎 京都府立大学文学部 教授  
森 公章 東洋大学文学部 教授  
吉田 広 愛媛大学ミュージアム 准教授  
若狭 徹 高崎市教育委員会文化財保護課 係長  
若林 邦彦 同志社大学歴史資料館 准教授

## 5 おわりに

2012・2013年度の諸活動はいわば2次的な展示プランの作成にとどまっていたが、2014年度に実施設計図を作成する日展が加わったことにより、立体的でより具体的な展示プランへ統合されてきた。そのため、展示資料や解説パネル、写真図版などのグラフィック、映像等を用いて来館者へいかに研究成果を発信するか、また展示を通して学会や広く社会から受信して研究へどのように活かすのか、資源・研究・展示の有機的な連鎖「博物館型研究統合」[平川, 2013]の重要性を認識させるようになった。さらに、複製資料や大型模型の製作に関する調査により、新たな問題提起やさらなる調査研究を促進することも認識させられた。これらはこの3年間の活動で得られた成果である。

その一方で、研究者、実施設計図作成業者、来館者の展示に対する視点は大きく異なるため、それらの調整の難しさも体感している。「発信と受信の展示」の実践を促進するため、いかにそれらの視点を近づけてリニューアル後の展示の細部に反映させていくのかが、今後当該事業に従事する者としての課題である。

2015年度は、2014年度に引き続いて実施設計図の作成を進めるとともに、展示工事に向けた準備作業が中心となる。本稿と同じく、第1室リニューアルの活動を随時報告していくつもりである。

### 謝辞

イエネコの模型制作に当たって、松井章先生（元奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）のご教示を賜りました。先生のご生前のご指導とご厚情に心より御礼申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。また、以下の方々にもご指導を賜り、資料や文献等もご教示頂きました。末筆ながら記して深く感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。

猪狩晴子，江田真毅，袁 靖，遠藤秀紀，金 憲爽，工藤雄一郎，川村清志，小池淳一，  
国府田良樹，菅谷智也子，納屋内高史，西本豊弘，長谷川善和，馬場悠男，春成秀爾，藤尾純江，  
藤鳥りえ，丸山真史，宮武博子，吉岡佐苗

### 註

(1)——松井 章氏のご教示による。

(2)——『日本霊異記』には死後にネコになる人物の話が、『寛平御記』には飼育している実在のネコについての記述がみられる [平岩, 1992]。

(3)——兵庫県姫路市四郷町見野古墳群の横穴式石室からの副葬品の中に、ネコによるものと推定される足跡の付いた須恵器が見つまっている [丸山ほか, 2011]。

(4)——徳島県観音寺遺跡の河川跡からの出土例 [西

本, 2007;丸山他, 2011]。

(5)——報文中で種同定に至った経緯が詳述されている。出土骨は幼獣が中心でツシマヤマネコ *Prionailurus bengalensis euptilura* 等との判別が難しいことに言及し、韓国金海会峴里貝塚からもカラカミ遺跡とほぼ同時期のイエネコの骨が見つかった点 [松井ほか, 2009] に触れ、朝鮮半島との交易により当時の宍岐や北部九州にイエネコが移入された可能性を考慮し同定に至っている [納屋内・松井, 2011]。

(6)——夜間に植物標本をネズミから守るため、19世紀のエジプトで飼い慣らしたヤマネコを荷物の周りに繋いでおく方法を現地で習い実行した、ドイツの植物学者シュバインフルトによる記述がある [ブラッドショー, 2014]。

(7)——遠藤秀紀氏のご教示による。

(8)——松井 章氏のご教示による。

(9)——袁 靖氏のご教示による。

## 引用文献

- Bar-Oz, G., Weissbrod, L., Tsahar, E. 2014. Cats in recent Chinese study on cat domestication are commensal, not domesticated. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 111(10):B876.
- ブラッドショー, ジョン (訳 羽田詩津子) 2014. 猫の感覚 動物行動学が教えるネコの心理. 早川書房, 東京.
- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館 2004. 国立歴史民俗博物館総合展示リニューアル基本計画. 59pp. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 佐倉市.
- Driscoll CA., Menotti-Raymond M., Roca A.L., Hupek., Johnson W.E., Geffen E., Harley E., Delibes M., Pontier D., Kitchener C., Yamaguchi N., O'Brien S.J., Macdonald D. 2007. The Near Eastern Origin of Cat Domestication, *Science* 317:519-523
- Driscoll C.A., Clutton-Brock J., Kitchener A.C., O'Brien S.J. 2009. The Taming of the Cat, *Scientific American*, 300: 68-75
- Hu, Y., Hu, S., Wang, W., Wu, X., Marshall, F. B., Chen, X., Hou, L., Wang, C. 2014. Earliest evidence for commensal processes of cat domestication. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 111(1):116-120.
- 林 良博 (監修) 2003. イラストでみる猫学. 講談社, 東京.
- 平岩米吉 1992. 猫の歴史と奇話. 築地書館, 東京.
- 平川 南 2013. 開館30周年記念論文集刊行の辞. 国立歴史民俗博物館研究報告(開館30周年記念論文集I) 178: 1-2.
- Ikram, S. 2005. *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*. American University in Cairo Press Series, Cairo.
- 金子浩昌 1984. 貝塚の獣骨の知識 人と動物とのかかわり. 東京美術, 東京.
- Malek, J. 1993. *The cat in ancient Egypt*. The British Museum Press, London.
- 丸山真史・馬場基・松井章 2011. 7. 須恵器に残された動物の足跡. 「立命館大学文学部学芸員課程研究報告13 姫路市見野古墳群発掘調査報告」. 173-176.
- 松井 章・丸山真史・菊地大樹・永井理恵 (訳 李 永周) 2009. 金海会峴里貝塚出土脊椎動物遺存体. 「金海会峴里貝塚Ⅱ」. 209-246.
- Morrison-Scott, T. 1952. The Mummified Cats of Ancient Egypt. *Proceedings of the Zoological Society of London* 121:861-867.
- 納屋内高史・松井章 2008. カラカミ遺跡出土の動物遺存体. 「宍岐カラカミ遺跡Ⅰ—カラカミ遺跡東亜考古学会第2地点の発掘調査—平成19年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究B(2)」. 129-144.
- 納屋内高史・松井章 2011. カラカミ遺跡出土の動物遺存体(まとめにかえて). 「宍岐カラカミ遺跡Ⅲ—カラカミ遺跡第1地点の発掘調査(2005~2008年)—」. 57-163.
- 西本豊弘 1991. 弥生時代のブタについて. 国立歴史民俗博物館研究報告 36: 175-194.
- 西本豊弘 1993. 弥生時代のブタの形質について. 国立歴史民俗博物館研究報告 50: 49-70.
- 西本豊弘 2007. 観音寺遺跡出土の動物遺体. 観音寺遺跡(Ⅳ)第2分冊: 203-219.
- 西本豊弘 2010. 日本の家畜の起源. 「辞典 人と動物の考古学」. 142-144.
- 大石孝雄 2013. ネコの動物学. 東京大学出版会, 東京.
- 王 子今 2006. 猫の驯化史. 歴史学家茶座 4.

- 
- 渋谷綾子 2014. 国立歴史民俗博物館総合展示第1室（原始・古代）の新構築事業—2012年度活動報告. 国立歴史民俗博物館研究報告 186 : 277-293.
- 渋谷綾子・大塚宜明 2015. 国立歴史民俗博物館総合展示第1室（原始・古代）の新構築事業—2013年度活動報告. 国立歴史民俗博物館研究報告 195 : 111-122.
- Vigne, J. D., Guilane, J., Debue, K., Haye, L., Gerard, P 2004. Early Taming of the Cat in Cyprus. *Science* 304:259.
- 山根洋子 2010. ネコ. 辞典 人と動物の考古学. 174-175.

渋谷綾子（国立歴史民俗博物館研究部）

上 奈穂美（国立歴史民俗博物館・技術補佐員）

（2015年4月10日受付，2015年7月27日審査終了）



資料調査の様子



生体復元模型の製作(復顔)



生体復元模型の製作(ポージング)



複製資料の製作(型どり)(1)



複製資料の製作(型どり)(2)



複製資料の納品検査



土層断面の剥ぎ取り(薬品の含浸)



土層断面の剥ぎ取り(1)



土層断面の剥ぎ取り(2)



展示資料の配置の打ち合せ



映像コンテンツの打ち合わせ



造作物の打ち合わせ

図3 展示予定資料の調査や製作, 業者との打ち合わせの様子



1 簡易模型(母仔ネコ)のポージング案



2 簡易模型(母ネコ)



3 簡易模型(仔ネコ)

図4 イエネコ復元模型のポージング案(1), 簡易模型(2・3)